

## 大東亜戦争の想い出

### 北支よりフィリピン戦（一）

岐阜県 瀬ノ上 尹 男

私共の年令で健康な男は全部・全員が軍隊の飯を食ったと思います。私も昭和十七（一九四二）年、現役兵として出征し、中国（北支・中支）、南方フィリピンへと連れて行かれ、九死に一生を得て帰り、栄養失調のため五カ月間苦しみ、漸く立ち直って戦後の苦しみも皆と共に戦い、平和な現在と健在であることを感謝して暮らしています。ここにこれらの我が想い出を綴ってみました。

昭和十七年八月、機密第一四六号により、第二十六師団要員として歩兵第六十八連隊補充のため現役兵として入隊した。

同年三月六日、鮮満国境通過。同十七日、満・支国境通過、河北省滄県着、独立歩兵第十二連隊第一中隊に編入、同地警備。

五月二十二日、教育のため大同陸軍病院に分遣を命ぜらる。各中隊より一人にて十二人選抜され、滄県より大同陸軍病院まで引率指揮を命ぜらる。

九月一日、精勤章付与さる。同二十八日、衛生教育終了。同月二十九日、原隊復帰のため報告、同地付近の警備。

九月三十日、昭和十八年、秋季冀共西作戦に参加。永定荘付近に在りて残留勤務、付近住民の怪我及び病人の治療に当たる。

昭和十九年一月十六日、警備地変更のため永家荘出発。一月十八日、雲邱着、同日より付近の警備。

二月六日、七日、銀廠及び大宮鎮、西北方地区の八路軍の肅正討伐に参加し、負傷兵数人及び現地住民が住居を焼かれ負傷者の手当。

同十八日、二十二日、第三中隊が八路軍の夜襲を受け応援要請の無電あり、急遽一個小隊応援に出発したが全滅後であった。我々は二次応援として出発したが、到着時、兵舎の柱が焼け残り、黙禱して帰隊。

同二十四日、警備地変更のため靈邱発、広靈着。

三月一日、命衛生上等兵。

五月七日、西北河南作戦参加のため広靈発。

同十八日、河南省陝県着。同日、陝県南方高地付近の戦闘に参加。

同十九日、温堂付近の戦闘に参加。

同十九日、独立混成部隊に追いつく。

独立混成部隊と交替し第一線に出る。

泉第五三一五部隊に特別挺身攻撃隊の命を受け、官庄付近に総攻撃に間に合わせよと無理な命令下る。

それから一日の前進が何が何でも十八里進むことになり、夜は三時間休めば前進せよと命令が出

て、落伍者は部隊の三分の一も出た。他に負傷者もあり、止むを得ず負傷者は残して前進した。

後方の陸軍病院も危険承知で、後方五キロ程度まで進んでくれたが、負傷者と別れて行くのは辛いことだった。

同十九日、大營着、同地付近の警備、十里付近の戦闘参加。

六月三日 第二次作戦参加。

同七日 河南省靈宝県分山道口付近戦闘。

同八日 官庄付近の戦闘参加。

同九日 河南省付近の戦闘参加。

(河南作戦)

我が部隊は、特別挺身隊の面目に掛けても、また、鉄チン部隊と異名が着く程、鉄帽を離さない部隊が目的地到着する。

隊長は定められた地点に到着できたことを殊の外喜ぶ。

「他の部隊では到底、指定の時刻には間に合わず、鉄道の鉄橋は落され、トンネルは爆破された情報

が入って来て、総攻撃の時間迄に到着できることを指揮官は祈っていたが、三時間早く到着すると「驚いた」と言つて、本部から部隊長が褒めて「総攻撃までまだ時間があるから、隊員にゆっくり休ませるように」と、ねぎらいの言葉を受け、上機嫌であつたと、中隊長は嬉しそう。全員は安心と満足感を味わつた。

総攻撃を山の上で杏子の熟したのを食べながら高見の見物をしている時、敵飛行機が、山の上をスレスレに飛んできた。それを古参兵が機首を狙つて一発で射ち、見事に命中、忽ち黒煙を残しながら敵陣地に墜落爆破した。山の上では中隊長はじめ全員が大喜び、大騒ぎであつた。

六月十七日 河南の戦場を後にして原隊に向かつて出発。

同二十一日 大同着 同地警備変更のため大同出発。

同二十二日 包頭着、同日より同地付近の警備。

七月 五日 警備地変更のため包頭出発。

七日 大同着 同地付近の警備。

十九日 第二十六師団比島転用のため大

同発。

二十一日 満支国境（山海関）通過。

二十三日 鮮満国境（新義州、安東）通

過。

二十五日 釜山着。

八月 八日 釜山出発。

二十二日 比島マニラ上陸。

二十五日 マンガタレン着、同地駐留。

同月二十二日～十月九日、比島全島第三期肅正

討伐参加。

十月 十日 歩兵第十三連隊第二大隊第六中

隊に転隊。

十一日 七日間第二次掲渡作戦参加。

二十日 レイテ作戦参加のためマニラ

発。

二十六日 ルソン島南端沖にて遭難し、同

夜半海防艦にて救助され、マニラ帰着。

十一月 三日 レイテ島作戦参加のためマニラ発、同日夜半戦況悪化しマニラへ逆行。

十九日 再度レイテ作戦のため、マニラ港出発。

二十五日 早朝マヌバテ島南端（リンボハン）にて敵機に発見され爆撃を受け、輸送船は銕が無く溶接であったため鉄板がバラバラとなり沈没、二万人余が、千人足らずとなり、夕方には海岸に戦友達の屍が船の破片等と共に流れ着き、哀れな血の海となる。

十一月二十五日 上岸した者は、隊毎に集結して安否を確かめ、少数の所は任意にまとまり、近くの山に入り木枝を集めて小屋を造り、食糧を探すと共に、作物らしき物を見つかるか途方に暮れながら夜を明かす。

住民とは「絶対に問題を起こさぬようにすることが一番大事なこと心掛けよ」を合言葉に、四、五人ずつ、帯剣で木の枝を取りこれを横に三〇センチ間隔につる草で結び、その上に椰子の葉に似た植物を乗せ、地面の傾斜地を利用し凌いでいた。しかし、食料が手に入らぬ。午後海岸近くで椰子の実を拾い割って食べた。朝から何も食べていない。

二十六日の明け方から腹痛を起こして眠れず、海に飛び込み濡れ鼠の体で椰子の実を空腹時食べたのが悪かったと気付いたが、下痢が始まり激痛、血便、赤痢となる。

どうすることもできず、絶食以外無しと決心、戦友達に「自分は赤痢だから近付くな！」と、少し離れた所に、木陰を利用し絶食にはいった。

自分は貴重薬のロートエキスを所持していたが「今自分だけがこの貴重薬を使ったら、現在いる者は薬物何一つ無いんだ」と考えて我慢した。

一番苦しんでいる時は血便が一日二十八回もあった。

それから三日後、私共のいる山へ艦砲射撃で、五〇メートル程離れた所へ砲弾が集中攻撃。

私達は不運と諦め覚悟を決めていた時、二人の兵が来て、しかも蔓草で作った担架を持って来て「一緒に行動せよ」との命令を受けました」と。これを見て思わず涙が流れました。私らは、二人の兵隊に心から「有難う、歩くから丈夫な杖を作ってくれ」と頼み、杖に替え、私の装具を二人に持つてもらい、後尾から杖にすがって、遅れないように、齒を喰いしばってついて行く。

夜明けが近づき、辺り一面に暈らしき景色が見えてきた。その時、「暫時休憩」の伝達が入り、私はその場に倒れるように横になり、意識朦朧となつてその後のことは覚えておりません。

付近がなんだか騒がしく、夢を見ているような良い気分、目が醒め、静かに近くを見ると、兵隊達が談笑し、傍らに食べ残しの芋がありました。暫くして芋を見たためか食欲が出て、寝たまままで芋を貰い、手に握ったまま、食べたなら、さぞかし痛み苦しむだろうかと、ためらっていました

が、もう我慢できず食い付きました。小さな芋は忽ち喉を通り、久しぶりに胃袋へ落ち着き、痛みも無く残っていた芋も三個食べました。

水を呑み、起き上がって手をつねって、自分は完全に生きていることを確かめ、近くに居た兵隊達に「俺は生き返ることができた。有難う」と座り直してお礼を言いました。

私が生き返ったことに吃驚して、先頭にいた隊長達の所へ報告に走り、隊長ほか五、六人が、これも走って私の所へ来て顔を見るなり、「生き返ったって？ よくぞ頑張った！」、皆も私を見て、「諦めていたが良く頑張った」と、代わる代わる励ましに来て喜んでくれました。

横田隊長が、「この場所は洞田（旧姓）が生き返った縁起の良い場所だから、今夜はここで一泊する」と決定して、今後の方針を立てることになりました。

直ちに、今後の方針について下士官以上集合して協議の結果、山中に分け入る班と平坦部とに分

けて、各二個班を作り、他に指揮班計五班にて捜索もする。但し、行動範囲は二キロ以内とする、と決めました。

早朝、指揮班、連絡を受けた者は、元気に出て行くのを送り出し、残留組は食糧探しに出発しました。夕方平坦部の組が揃つて来た所によると、点在する農家は貧しい生活らしく、牛が一頭豚が二、三頭、鶏がいた所もあり、これは良い方で、牛のいない家等、畑は家のまわりだけで、田は見当たらないとの報告でありました。

山中へ向かった組は、山の麓にはバナナの林(小さい)果樹等も少々ある。そこには水もあり、中には大きな木も生えている。また山へは余人の入った様子も無いとの報告であった。が、我々がこの島にいたことは米軍は知っているから、いつ、再び艦砲射撃を受けるか判らない。山の方が安全である。という事に決まり、住民の農作物を荒らすことを極力止めて、他の場所を探そうという事に落ち着きました。

山に入り姿を隠せば住民も安心するし、米軍も、空襲で殆ど全滅状態だから再び襲うことはなかるうが、油断は禁物であるから山に入ることに決定しました。

食糧は二、三日分用意して、日当たりの良い、水のある場所で、敵から発見しにくい所を探して落ち着きました。

その時の総員は百人にも満たず、銃機は十挺足らず、船を沈められた時は朝食の最中で、丸腰でいた者が多かつたため、自分の装具も持たぬ者は半数以上あつた。敵に見付かれば、どうすることもできません。

一泊して移動する時は、火の始末は勿論、足跡まで消して出掛けました。私は病み上がりのため後尾を黙々と付いて山に登りました。

途中、小さな川の側で芋の昼食を済ませ、二時間程歩いた所が少し高台になり、草原があり、その上を我々の陣地にしようとの意見が出て、水の便等を考えて、近くに小屋作りを行いました。雨

を防ぐためバナナの葉を集めて屋根を作るだけの小屋を作り、山暮らしを始めました。

昭和二十年九月二十八日までの間、島民ゲリラに攻められる。その夜米軍艦砲射撃を一回受け、死者多数出て、全員は四十人弱となりました。木の実、野生のバナナ、ドリアン、トウモロコシ等を集め、小さな川を掘り水を溜めて水風呂を作つて、垢を流しながら、遠い日本の故郷を想い、明日をも知れぬ命を語り合いました。日が経つに従い、栄養失調と警戒心のため、眼だけが光り、声も大きな声が出ぬ位でした。

新潟出身の兵隊で腎臓が悪くなり、身に付けているズボンが、身体全体が腫れて皮膚から水が吹き出して、いつも濡れズボンを着けて苦しそうにしていた。そこで毎日、山を降りて住民が作っているトウモロコシの畑家に行き、近くに人が居たり、家がある時には了解を得て、トウモロコシの枯れた毛を取つて来て、それを煮沸して水の代わ

りに吞ませました。漢方薬にそのことがありますので、毎日材料を探しに出掛けました。

ある日、小さな家に行き、材料を頼みに許しを乞うために家を覗いた所、主人が足を負傷した所に行き合わせ、警戒せぬよう手真似で安心させ、よく診たところ骨には心配がないことが解り、古いけれど傷薬を持って再び訪ね、痛み止めと傷薬を付けてやりました。

次の日も、三日通つて傷の痛みも止まり、包帯の換え方も教えてやり、数日後に尋ねた時には歩いていました。奥さんも出て来て二人でお礼を言う。その上、食糧も沢山貰つて帰り、暖かい心の籠もつた食事ができ、皆喜んで食べました。

九州出身の原曹長は気丈な人でしたが、ある日、米軍の小さな倉庫を発見し、中にあったダイナマイトを持ち出して、これに信管を付けて海に行き、魚が回遊してくるのを捕るのだと威勢良く出て行きました。ちょうどその時、北海道出身の波間准尉もその海岸にいて、爆薬の破裂する音を

聞き不審に思い、静かに近付いた所、原曹長だと分かつて吃驚仰天「どうした」と問えば「失敗した、このまま死なせてくれ」と言って泣いているのを無理に連れて帰って来たとのこと。

早速傷を診れば右手の掌が無くなり、人差指が皮だけでつながっていました。私は傷を診てすぐに消毒すべく近くにいた者を呼び、大至急お湯を沸かすよう頼み、止血して、煮沸した湯を冷した水で洗って消毒、傷の骨の破片及び、指も切り取り、皮を寄せて縫い合わせ、消毒した布で包みました。蠅を防ぐのが大変な作業です。

一段落しましたが、麻酔薬らしき物は何一つ残っていませんから、あとは本人の精神力と蠅を防ぐことで、一週間看病しました。曹長は帰国後傷の手当て、義手を作って貰い、傷痍軍人の手当ても受け安定した生活をしています。現在も、九州からは「蜜柑」を、当方からは「林檎」をと、相互に送り合っています。

話は元に戻りますが、昭和二十年九月半ば頃「米軍の偵察機も飛んで来ないのか音もしない」と話していた頃、芋の蔓を取って来た兵隊が、こんな紙が途中にあつたと言って見せました。

何の気なしに読んだ所「日本の兵士に告ぐ、日本国は無条件降伏したから、山中に居る者は速やかに山から降伏し出て来い！」と印刷してありました。

数日後、陸軍の参謀が山まで登って来られ、今までの労をねぎらい、隊長と下山の日程を決めて帰られました。後はマスバテ島で捕虜收容所に入りました。

生まれて初めて味わう捕虜生活は哀れなるかな、鉄条網の動物園そのものです。狭い所に折りたたみのベッド。三分粥が飯盒の蓋に軽く一杯だけです。栄養失調のためか動かないと寒くて震えていました。

現地人の夫婦が荷物を持って、收容所の中を採しながら行くのを戦友が見付けて知らせるので



す。よく見ると、私が怪我の手当てを何回か治療して回復した島の夫婦でした。

私の顔を発見すると、手真似で呼んでいます。

久しぶりに見る元気な姿に安心。夫婦も足を見せ喜び、野菜の芋、バナナや他の果実を、監視の眼につかぬよう渡して「早く隠せ」と手真似をして満足そうな顔をし、最後に、しっかりと握手をして別れて行きましたが、彼の夫婦の家から収容所までは、少なくとも三〇キロ以上離れていたかもしれない。あの時、余程嬉しかったのだろうか。こんな所まで歩いて来てくれた真心に打たれ涙が出ました。このようなことは北支にいた時も経験がありました。人の心は、敵も味方もない、人種もないものと今でも痛感しています。

レイテ島タクロパン収容所に約二カ月おりました。その間、毎日の如く使役に行きます。ある時は、朝から夕方までの自動車洗浄の使役が当たると、これが一番辛い作業でした。栄養失調の体

で、水に濡れ、夕方寒くて監視の眼を盗んで陽に当たり、少しでも体を温めることに心掛けましたが、私は使役には率先して行きました。

幸いなことに、十二月十八日、突如呼び出され、トラックに乗り、一度も行ったことのない船着き場へ行きました。整理して待っていると、約一時間後、名前を呼ばれました。次々と呼ばれた者は別の所に整列している。約一時間近くありました。現地人が首実検をし、私共の中から十人余り連れて行かれました。

間もなく銃を肩にした兵隊が来て、一列にして船の方へ引率し、舟に乗ることができました。何の前触れもなく乗船したので、アメリカ本土へ行くのかどこへ行くのか一切説明がないのです。貨物船の甲板から階段を降りれば船倉で、仕切りも何も無く、広い所に三十人程しかいません。船が揺れる度に体が左右に転がってゆく。船酔いが激しく起きていることができず、また食欲もなく、失神せぬばかりでした。

食事は、一日に缶詰一個が配給になりますが食  
べることができません。九日目、誰かが「富士山  
が見えるぞ！ 日本に間違い無いぞ！」と叫び、  
皆が一斉に甲板に上がって行きました。暫くし  
て、大きな声で「間違いない、富士山だ」と喜び  
の声を発して降りて来ました。

私は、これ程苦しくては、長く生きていられぬ  
かも知れぬと思ひ、全身の力で起き上がり、階段  
に手を付き、一歩、一歩よじ昇って甲板に座り込  
み、何年ぶりかで見える富士山を眺めているうち、  
故郷の姿と重なり涙が流れてまいりました。

うっとり眺めていると、監視兵が来て「下へ降  
りろ」と注意したので、階段の所まで行き、這つ  
て降りかけた所、監視兵が私を助けて下まで降り  
してくれました。

夕方までに浦賀港へ着き、船から降りる頃は日  
が暮れて真っ暗でしたが、荷物らしいものは何も  
ないのと、日本の土が踏めるという喜びとで、一

人で皆と一緒に行動することができました。砲兵  
学校で一晩泊まり、味噌汁で晩と朝食を食べまし  
た。

翌、十二月二十八日、朝、整列の声がかかり、  
復員証明書を渡すとのことで並んでいると「ご苦  
労でした」と言う言葉と、一〇×一五センチ角位  
の和紙に書いた復員証明書と住所氏名、それに乾  
麵包二食だけ貰い解散でした。

私が復員した時には米軍の擬装服で、軍服は無  
いからと雨コート一枚を受け取って、雪の積もつ  
た故郷へ帰りました。米軍の編上げのズック靴を  
履き、十二月三十日の夕方、雪の七〇センチ余り  
積もった生家へ辿り着けば、両親はいましたが、  
一目見て「お前誰じゃ、家の子は戦死して役場か  
ら通知が一年も前に来ている。お前は贗者だ」と  
言つて、いくら説明しても駄目で、私も家には入  
る気持ちはありませんでした。

マスバテ島で死ぬれば良かったと思ひ……。故郷  
を出て行く時は御国の為と、学校の子供から村の

人達まで沢山の人達まで沢山の人達が、真心をもつて送ってくれた。お国のためと唄われて、雪の中を村はずれまで送ってもらったのに……と。それが親にまで見放されてしまったのかと思うと悲しくなり、帰つて来なければ良かった、戦死すれば親孝行になつたのかも知れなかつたと、悔みました。

何と情けないことだろう。雪の中でズック靴は濡れて身体は冷えて悲しみが先に立ち、どうすることもできず立ちつくして居た所へ、隣のお婆さんが通りかかり「お前達は何だ、この日暮れに」と言つて家に寄りました。母親が「先程南方の方から帰つて来たと言うけれど、家の子は南方で戦死という通知が、役場から半年も前にあつたので信じられず、見れば痩せて、こんな顔じゃなかつた」と。

隣のお婆さんは「お前たちが、疑がつても無理はないが、こんな寒い時に外に居て震えておらずに、今晩家の中で、話をして見よ。親子のこと

じゃ、他人なら、しつぽが出るわい」と、話を打ち切り、一先ず家に入つて話をする事になり、落ち着いて御飯を食べながら話しますと、全部話は合つています。

御飯の支度を母親がしてくれましたが、茶碗のご飯を三分目程にして貰い、野菜の煮たものを少し口にただけでした。他に、欲しい物は無く、ただ「寒い、眠い」の二言だけです。その晩は、死んだように眠り、朝起こされるまでひと眠りでした。

朝、簡単に両親に話し、食物は島へ渡る前から、不自由の連続であつたこと。着衣は破れ、椰子の葉で草履を作り、山の中で一年も生活し、また、赤痢になり、駄目だと覚悟したこと。栄養失調になり、山に入り尚更に食物が少なくなり、空襲も激しくなつたことを話しました。

また、最初にマニラからレイテに向かつたのを数えると五回目であつた。一回目は状況が悪くなり引返し、二回目は船が座礁し海防艦に助けら

れ、三回目は急に悪状況のため逆戻りをする。次には船も最後の船となり、溶接張りの船で、島陰に隠れながら、もう半日余りという所で空爆を受け沈没する。考えれば考える程我が身が何回も死んだ筈なのに不思議に生きている？

タクロパンから浦賀への船の中では九日間に五食しか食べておりません。浦賀で味噌汁の一食でしたと話しました。支給された乾麵飽二袋は土産に親に渡しました。食欲が無く一メートルある囲炉裏に大きな薪をくべて暖かくしてあるのに寒さが取れず、食欲も無いので炬燵に入り寝てしまいました。

翌朝母が起こしに来て死んだのではないかと、心配になったと言い、時間を聞いて驚きました。昨夜は八時頃寝たはずで、今はもう十一時になるところです。母も生きていて良かった、死んだのではと心配していたと、後から笑われました。

腹が空いただろうといういろいろ食べ物準備してくれましたが寒さがとれず眠いだけです。長い

間、十九年十二月初めから、芋蔓から、デンデン虫、豚の皮、川の蟹等、小さな虫は生きたまま食べて、栄養等は考える余裕はなく、着ている物、履物は破れてくるので椰子の葉で縄を作り、外側をグルグル巻きして行動するしか無かったのです。

衣類も小さな町で、無人を幸いに衣類らしき物を皆山に運び、之を使って足袋の代用を作り、活用できる物は生かして使いました。今、当時の生活を想い起こせば人間の生活ではありませんでした。

食糧も山には限りがあります。人間が手を加えてこそ初めて価値が生まれるもの。私達も、もう少し救助されなかつたら全員栄養失調になり餓死したかも知れません。

家へ帰ったお陰で、食糧の心配も空爆の恐ろしさも無いけれど、体力が付かず、時折、南方でゲリラに苦しめられた時のことが悪夢のように浮かび、捕虜生活の苦しかった事が頭から離れず、い

つまでも苦しみました。

それから数年後、恩給資格者の申請があり、私の兄は該当しました。私の軍歴は、

昭和十九年八月二十二日、マニラ着。

二十五日、マンガレー着、同地駐留。

八月二十二日より十月九日まで、比島全島第三

期肅正討伐に参加、部隊編制、歩兵第十三連

隊第二大隊第六中隊に転隊となり、

十九年十月十一日より第二次揚渡作戦に参加。

十月二十二日 レイテ作戦参加の為マニラ港出

港、

同二十六日 ルソン島南端沖にて遭難し、同日

海防艦にて救助されマニラへ戻る。

十一月 四日 悪状況の為マニラへ逆行す。

〃 十九日 再度、レイテ作戦の為マニラ

発。

〃 二十四日 マスバテ島南端（リンボハ

ン）にて敵機発見、戦闘中輸送船沈没、マス

バ島に避難上陸。比島軍最高司令部の命によ

りマスバテ島の警備。

昭和二十年十月二十四日 武装解除、捕虜収容

所へ入る。

同 二十四日 捕虜収容所発。

同 二十六日 タクロバン収容所着。

同 十二月十八日 タクロバン発。

同 二十七日 横須賀着。

同 二十八日 復員除隊。

同 三十日 実家へ到着。

## 比島戦末期

### 生き残った通信隊員

秋田県 鈴木寅吉

大正七（一九一八）年一月七日生まれですから

昭和十三（一九三八）年徴集となります。現役で

はなく、昭和十九年三月十五日秋田の第十七連隊

の留守隊に召集を受けました。三カ月の教育召集